



新聞記者たらんと

(附 必要な性格)

自分は實際社に入社して新聞記者を志願するとする未だ日も浅いのであるが、ならばそれは誠に誤った考一寸見習したこと、今迄のであり丁度木に寄つて魚を体验から見れば學生がこの得るに等しいものである。面倒な記者をこの複雑な失敗も必要であらうが先づ聞界へどんな抱負と決心で進んでゐるのだらうかと云ふ事である、昨年、昨年あたりの専門學校以上の受験生の類も實に多い、又その競争も多難である、たやすく考へ込んでこんな事業へ進もうとすればそれは大なる失敗に終るであらう、云ふ自分自身も今は失敗と云ふ事であるが、新聞ほどこの個性特に、感のきく人、叩いた本の音うなづく人でなければなるまい、すぐ耳と目を左右する位であるモーターの音聞いてゐる記者の長所をのばす事によつて、新聞記者はやせてゐる方がいいと云ふてゐるこれはやせてゐる事がつまると、新聞記者は活躍を主とし神經によつてゐるのである、この時に新聞人は先に社會の物ごとを知らねばならない、その事象社會に對する研究態度も常に先進的勢力が必要となる事になる、この事を見ても記者にならうとする諸君にはこれ等の適應性がなければならない、若しこの神經的訓練も研究心もなく

姉
猿山政光
信二は姉が結婚すると定つた時校をむしり取られた様な心細さと、窓中に外を窓に見つかりながら泣いていたが、娘は泣き声が大きくなり、忽ち心が憂へに震ふられた、勘で歩かなければならぬ自分の體を確り温いされて、思はる

腋下に抱へて導いてくれた姉のあの優しい態度が見えた
えないのであるが、姉の胸の意味が何となく仄かな匁ひを持つて掌に残つてゐたがして、娘を開けて這入つてゐるが、娘は江頭の流れを觀て

『逝くものは斯くの如き』

『あら信ちゃん泣いてゐるのね』

『あなたに』

『あやかりたい男』

『さや?』

『春風秋多幾星霜死して名

を留むる者果して何人?』

『感無量』

『感無量である』

『大聖孔子は江頭の流れを

感無量』

『紅夢樓』

『墓碑の断感』

『天下一人の知己だに

あらば以つたために死す

利や權や畢竟何するもの

べし

『思はそれからして飛んで

感無量』

『來ん』

『（續く）』

『赤誠心に燃ゆる青年を必

る』

『赤誠心に燃ゆる青年を